The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 日本人の人間モデルと「間柄」 |
| Author(s) | 濱口, 恵俊 |
| Citation | 大阪大学人間科学部紀要. 1982, 8, p. 207-240 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/12598 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 日本人の人間モデルと「間柄」

濱　口　恵　俊

# 日本人の人間モデルと「間柄」

## はじめに

日本人の民族的性格がどのようなものであるかについては，今は一つの古典とも言うべきベネディクトの『菊と刀——日本文化の型』(1946) を嚆矢として，多数の研究によって究明されてきた。それらの諸研究は，日本人論・日本文化論・日本社会論などと呼ばれてきたが，ここではそれらの研究領域に，日本論という総括名称を与えよう。

これまでに展開された日本論において，四つの系譜をたどることが可能である。第一は，日本文化のパターンないしエトス (ethos) を探究する研究である。ベネディクトの「恥の文化」説と，その内在的批判としての作田啓一の『恥の文化再考』，あるいはイザヤ・ベンダサン（山本七平）の「日本教=人間教」の教義分析，中村元による日本人の思惟方法の比較検討などが，その代表と言えよう。

第二は，日本社会の基本的構造と原組織形態の研究である。同族の実証的究明を通して日本の親族体系を明確化した，及川宏・有賀喜左衛門・喜多野精一・中野卓らの研究，川島武宜による「日本社会の家族的構成」説，『タテ社会の人間関係』『タテ社会の力学』を書いた中根千枝の社会人類学的研究，またこれとは対照的に心理人類学の立場から，日本の原組織イエモト（家元）における「縁約の原理」を見いだした，F・シュー（許烺光）の理論，などはこの系列に属する。

第三のアプローチは，日本人の国民性の解明である。精神医学の視角から，「甘え」仮説を提起した土居健郎，それを批判するとともに，日本人における「人と人との間」の重要性を説いた木村敏，日本人の極めて世俗的な「罪」の意識を TAT で実証したデボースと我妻洋，県民性を追究した祖父江孝男，これらの人たちによる比較精神医学的・心理人類学的分析を挙げることができよう。村松常雄，林知己夫がそれぞれ中心となって行なった国民性の調査研究も，すぐれた業績と言えよう。

第四の系譜は，比較近代化論の立場からの日本論である。R・ベラー，R・ドーア，E・ボーゲルらによる，日本の近代化（産業化）の分析も鋭いが，内在的立場からの比較近代化論を試みた，武田清子や鶴見和子のすぐれた論究がある。最も新しい研究としては，日本の歴史をウジ社会からイエ社会への展開として眺め，日本における集団主義的近代化が，社会の近代化の普遍的プロセスを示すものだとする，村上泰亮・公文俊平・佐藤誠三郎の『文明としてのイエ社会』(1979) がある。

本稿は日本論のオーバービューを意図するものではないから，これ以上これまでの諸研究を列挙する必要はない。だが，今までの数多い日本論のほとんどに，分析上の基本的問題点が潜まっていることだけは指摘しておかねばならない。その問題点というのは，分析にあたっての範型（パラダイム）が，日本固有のエミックス（emics）に必ずしも依拠していない，ということである。そうしたエミックスは，内在的立場でしか把握されえない文化的特質であるから，外国人研究者がそれに基づく分析視角をとることには，かなりの困難を伴う。けれども，日本側からのアプローチにおいて，自らのエミックスを活用することなく，自文化を，たんにエティックス（etics）としてしか眺めないことは，研究上の利点を自ら放棄することになりはしないだろうか。

従来の多くの日本論は，分析上のパラダイムを，欧米起原のそれに求めるのが普通だった。いわゆる方法論的個人主義（methodological individualism）の立場である。この方法論的立場からのアプローチでは，当然のことながら，十分に説明しきれない事象を残す場合が多い。そこでこの難点を克服するためには，やむを得ず，普遍概念・一般理論と考えられたものとは別個の，何らかの独自的概念・特別理論を用意することが必要になる。たとえば，「恥の文化」論，「タテ社会」論，「甘え」理論がそれである。けれどもそれらが，日本的特質をエミックス的に把握しきれているとは言い難い。なぜなら，それらの理論を構成する基本概念やスキームが，依然として西洋起原のものであるからだ。「個人」「集団」「パーソナリティ」などの概念が，実は culture-bound conception であるのに，気づかれぬまま，無条件で理論構築に用いられている。あるいはまた，「罪」と「恥」という二元論的対比に基づく分析スキームが，全人類に普遍的なものとして採択されているのである。[1)]

日本論の基本的アプローチ（パラダイム）を，方法論的個人主義から，日本固有のエミックスに根差したものへと転換することが強く要請されよう。その転換は，社会=文化を比較する場合の基準の相対化をはかるものとも言える。すでに述べた，第四の比較近代化論の立場からの日本研究は，このことをも意図している。この傾向は尊重されねばなるまいが，内在的立場からの比較基準それ自体は，あるいはその基礎となる日本人のエミックスは，まだ十分に確定されていないように思われる。それの確定には，まず第一に，日本人の人間モデルがどのようなものであり，そして互いの間柄がいかなる性格をもつかについて，再検討する必要があろう。少なくとも方法論的個人主義からの脱却にとっては，この作業は不可欠である。本稿の目指すところもまたそこにある。

## I　日本人の人間モデル

普通「人間観」と呼ばれる“にんげん”存在に関する本質規定は，それぞれの文化によっ

て様式化され，社会ごとに自明な基準観念として存在する。すなわち，“ひと”が本来どのような意味で社会的存在であるかが，各社会で基準化され，“ひと”の存在形態についての *sui generis* な社会的通念が，何らの論証なしに公準的に存在するのである。たとえば，個々に独立した行動主体が“ひと”の本来のあり方だと信じて疑わない民族もあれば，また，集団生活を営むかぎり，たとえ成人どうしでも相身互いだとして，依存し合うのが“ひと”の本態だとする国民もある。大別すればそれは，独立独行型と相互依存型とに分かれよう。

いわゆる「人間性」の客観的な実在にもかかわらず，各文化における“にんげん”存在についての主観的規定（人間観）は，かなり可塑的に形作られると言ってよい。しかもそれは，各人の自己規定にかかわるだけでなく，自己と他者との関係のあり方についても，基準的限定を加えることであろう。つまり，各社会の「対人関係観」もまた，「人間観」との深いつながりにおいて，文化的に様式化されると考えられる。

### 1） 主体システムの二類型——単独的主体と関与的主体——

すでに「人間モデル」という語を定義なしに用いてきたが，ここで概念化しておこう。それは，「主体システム」の文化的な様態（cultural mode）を指している。すなわち，文化的に規定される「人間観」を具現化した，「主体システム」の類型だと言ってよい。では「主体システム」とは何か。村上・公文・佐藤の定義に従えば，「主体」とは，「認識・評価・行為について一定の独自なルールないしパターンをもつ存在であって，いわば自らの目的のために適切な行為を一貫して選択しているとみなしうる存在」を意味する。[2] こうした「主体」は，合目的的行為のエージェント，すなわち行為者主体（actor subject）を指すものと解されるから，その具体的レファレントを，たんに一個の“にんげん”個体（いわゆる“個人”）に限定する必要はない。“にんげん”複合体としての集団を「主体」と想定することもできる。だが，いずれの場合にも，当該の「主体」は，上位または下位の「主体」との直接・間接の連関性を前提として存立しうるものなのであり，したがって，つねに「主体システム」を構成していると見なされる。

「主体システム」としての“にんげん”の第一の基本特性は，それが，自然環境および社会環境のなかにあって，自システムをつねにホーミオスタティックに維持存続させて行こうとする，自己保存系としてのオープン・システムである点にある。しかし，環境との間でエネルギーと情報の交換（入・出力）を行なって自己保存をはかるのは，人類に限らず生物一般の共通属性である。“にんげん”の場合には，情報の自主的選択（主体的な情報処理）がとくに秀でており，この意味で“ひと”は「自己制御系」（吉田民人の用語）の典型だと言ってよい。自己に必要な情報を吟味して取り入れることは，当人がそのことを通して学習を行なうことになる。また，環境への適応に際して，自己発展・自己変革を志向しているとも

言える。つまりその場合には，“にんげん”というのは，自システムの構造変動を意図的・計画的にもたらそうとする「自己組織系（self-organizing system)」だとも再規定されよう。自らの再組織化にあたって，構造のアセスメントがなされ，その機能の飛躍的向上がもたらされることもありうる。このとき“ひと”は，入力に必ずしも比例しない大きな出力を得ているのであり，この意味で“ひと”は「非線形システム」だとも言えよう。

“にんげん”の現実世界（環境）を主体（subject）と客体（object）とに大別するとき，「主体は，客体を認識，享受，制御しようと試みる能動的な存在である。しかも，主体は，時には自分自身および自分と客体との関係をも，自らの認識，享受，制御の対象，つまり客体とすることができる」と公文俊平は述べている。[3] “にんげん”が「自己組織系」として行動しうる基盤は，このように，「主体システム」が自己および自己と客体との関係を客体視することが可能である，という点に存する。いわゆる主体性なるものは，主体それ自体，あるいは主体間の関係を対象化すること，もしくは客体視しうる能力をもつことを意味しよう。こうした客体視に際して，自主体そのものの対象化に力点をかけるか，それとも，自主体と客体（他主体をも含む）との関係性に焦点が合わされるかによって，「人間モデル」が類型化されることになろう。

たとえば欧米人やアラブ人の場合，他者とのかかわりそれ自体よりも，自己自身を対象化し，自らに固有の行動主体性を確立しようとする傾向が大きいように思われる。また，そのような主体性の確立が社会的に要請されるのだとも言える。そこにおいては，他主体との何らかの関係をもつ前に，先ず自主体の不可侵的な独自性を確認し，それの擁護を絶対的な条件として相互作用に入るのである。すなわち，それぞれの唯我的主体が，自己を確立した後に，互酬的な意図から社会的行為（利得）の交換を行なうものと考えられる。従来用いられてきた「社会関係（social relation)」という概念は，こうした主体間の相互作用の安定的（もしくは非安定的）状態を指している。また「集団（group)」は，いくつかの唯我的主体から成る複合システムだと一般に考えられてきた。要するに，「社会関係」「集団」は，そうした唯我的主体を前提にして設定された二次的構成概念なのである。

結局のところ，欧米人などでは，あくまで単独個体としての自己自身を対象化し，そこに唯我的な主体性（自我）を見いだして行こうとする傾向が強い。彼らにとって「社会関係」や「集団」は，そこからの帰結形態でしかない。こうした場合の「人間モデル」の類型，すなわち，唯我的主体としてのシステムを，「単独的主体（individual subject)」と名付けよう。これと対蹠的なのは，日本人をも含む東アジアの人たちを特色づけている「関与的主体（referential subject)」である。この「人間モデル」では，自己自身の個体的存在よりも，他主体（他者や自らの属する組織など）との連関性を対象化する。そしてこのことを通して自主体の存在を意味づけるのである。

換言すれば，他主体に対して自らがいかなる機能的連関（役割）をもつかが，第一に，しかも最も強く意識され，その役割的なつながりを通して「主体システム」が形成されることになる。その場合，他主体（他者）とはいっても，身近にいるか，あるいは少なくとも既知である者に自ずと限定されるきらいはある。だがそうした人たちとの何らかの対人的連関のなかで，自己が何者であるかについての認識が次第に明確となり，またどのような判断に基づいていかに振舞えばよいかという，評価と制御の中味が確定されるに至る。つまり，自己の心理=社会的アイデンティティが，他主体との関連で確立されるのである。もっとも，そのような主体性は，当該の関係に関与する“ひと”自身の立場で眺められたものであるが，この場合，対象化のレファレントが，自主体のみならず，自・他両主体間の関係性を含む以上，そこでの「主体システム」は，より広く，客体視された対人脈絡（human nexus）それ自体によって構成される，と考えた方がよい。ここでいう「主体システム」の一形態，すなわち「関与的主体」は，第一に，主体化された間柄それ自体，第二に，その間柄にあって主体的に行動する“ひと”（脈絡人）を意味する。

このタイプの「主体システム」，ことに“脈絡人”は，他主体との組織された行為連関を維持しうるような，連帯的主体性を保持する。多くの場合，既知の，あるいは身近なところにいる誰かとの“親密な”関係[4]のなかで，他主体との相互包摂的なかかわりがもたれる。それは極めて有効な組織活動を生みだす要因ともなる。この意味で「関与的主体」は，社会体系の側から眺めれば，「単独的主体」よりも社会性のオーダーが一段階高い「主体システム」だと評しえよう。「単独的主体」では，組織化への意識的努力が改めて要請されることになるが，「関与的主体」にあっては，必ずしもそのような働きかけを必要としないからである。だが，いかに自発的な協同があるからといっても，そこでの“ひと”が，組織のなかに埋没し，自律性を失ってしまっているわけではない。“ひと”の個別的存在に先行すると想定された対人脈絡のなかに，各主体が適宜位置づけられているだけのことである。“脈絡人”としての行動主体性は，十分に保有されているに違いない。なぜなら，対人脈絡それ自体が「主体システム」を形成しているからだ。

### 2) 「人間モデル」の再構成——「個人」と「間人」——

上述のように，「主体システム」を「単独的主体」と「関与的主体」とに類型化するとき，その分化基準は，対象化（客体視）のレファントを自己自身にとるか，それとも自己と他者（客体）との連関性にとるかの選択にあった。それは，“にんげん”が自らを把握するときのモーメントを，個別性に求めるか，それとも集合性（全体連関性）に求めるかの選好（preference）であるとも言える。もっとも，ここで注意が必要なのは，これらの二つのモーメントが相互排他的なものではないという点である。個別性に依拠して自己自身の対象化

に向かうときも，その主体は，他主体との連関をまったく考慮の外におくことは許されない。また逆に，集合性を重視して，自=他の主体間連関を先ず対象化しようとする際にも，それぞれ個別に存立する両主体を前提にせざるを得ない。これら二つのモーメントの交錯については，村上・公文・佐藤のつぎのような指摘からも明らかであろう。「個々の平均人は自己完結しえず，つねに他者との交流を必要とする。しかも，他者との交流の作り出す間柄に入ることによって，人はそれぞれ交流以前とは多少とも異なったものに変質し，その意味で間柄は個々の人に刻印を押す。このようにして間柄は個々の人を作り上げていくが，間柄を作り出し維持するものが個々の人であることも間違いのない事実である。また，間柄の性質自体もどんな人がそれに入ってくるかによって，多少とも影響をこうむる。」[5] このように両者が相互規定的だとすれば，「間柄と個々の人とは共に在るとしか言いようがない」[6] のかも知れない。

ところで，ここでいう“個々の人”すなわち「個人（individual）」は，自主体のみの対象化によって確立される主体形態，つまり「単独的主体」のことだと再定義されよう。それは，「関与的主体」のように“間柄”を内包しない「主体システム」である。「個人」は，もはや分割が不可能な存在という原語義からも明らかなように，社会的存在としての究極的単位を意味する。したがって「個人」というのは，自己についての確固とした意識をもち，自らの判断と責任においてフリーに意思決定を行ない，そしてなんとか自力でもって仕事を遂行しようとする，個別性の大きい存在である。“ひと”がこうした「個人」として対象化される場合に，自主体の絶対性が強調されてくるのは，必然的な帰結だと考えられる。そこでの“人と人との間柄”は，観念上「主体」そのものとは切り離され，自主体の存続のための客体的手段と見なされがちである。つまり「個人」にとって他者との関係は，つねに操作可能だと見なされよう。そして間柄は，「個人」という主体からの派生体であるにすぎない，とされる。

「個人」において，他主体との連関性を「主体システム」とは別次元の事柄として処理することには，もちろん論理的な必然性がある。しかしそうだとしても，前述のように，間柄と個々人との併存性という視角からすれば，そうした処理法は，社会的環境に対する一つの限定された対処の仕方である，と言わねばなるまい。そこでは，共にあるべきはずの間柄を，各個体からわざわざ切り離そうとしているのだから，社会システムの編成での効率は，必ずしも高くないのである。

これに対し，間柄と個々人との併存性（ないし相補性）を十分に念頭においた上で，他主体との関連性を対象化する場合，そこに「関与的主体」が確立される。それは，ある意味では，間柄それ自体が自立化した形態だと考えざるを得ないが，[7] そのなかに組み込まれた“ひと”は，そうした間柄を体現した個々の存在として定義づけることが許されよう。いま

それを「間柄的主体」と呼ぶことにしよう。それは，「個人」として表出される「唯我的主体」とは，存在論上，根元的に異なる主体の形態を構成する。和辻哲郎のいう，“人間（じんかん）”に生きる“人間（にんげん）”だと言えようか。また木村敏のいう，「人と人との間」にある“ひと”のことでもある。そのような「間柄的主体」を，概念上「個人」と区別して，「間人（the contextual）」[8] という名称で呼ぶことにしたい。

「間人」は，日本人において典型的に眺められる「人間モデル」である。しかしそれが「主体システム」の一類型であるからには，分析概念として他民族に適用することもできる。「個人」が，日本人の行動分析にある程度は適用可能であったのと同じように。だが，社会の分析におけるそれの機能的意義は大きい。すなわち，単独の行為者主体（individual actor subject）である「個人」と比較した場合，「対人的な意味連関の中で，連関性そのものを自己自身だと意識するような，にんげんの在り方」[9] を指す「間人」の方が，個々人と社会システムとの有機的な連関性をより合理的に説明しうる「人間モデル」であるのは確かだ。「間人」が他主体との行為連関そのものを基体（分析単位）にする「主体システム」である以上，個体と社会システムとの接合に関して，無理のない理論化が可能である。少なくともこの概念を用いることによって，社会名目論か社会実在論かという，個体と社会とのかかわりに関する実りなき二元論的対立を避けることができよう。[10]

今西錦司によれば，種に属さない個体などはありえないのであって，複数個体から成る社会（集団）は，「個体の再生産を確実にするための場」なのである。生物一般に関して，「集団とは種族維持のための，個体の共働 co-operation である」と言いうるならば，当然，社会と個体との起原は同時的であり，人類の場合にも，最初から，社会とともに個々人がある，と考えてしかるべきであろう。[11]「間人」概念によるかぎり，この同時性はまったく自明な事柄に属している。

すでに和辻哲郎は，「我々は日常的に間柄的存在においてある」[12] と述べている。木村敏もまた，同じことを，「われわれ日本人の体験構造の中においては，人はつねに人間としての間性，間柄性において見られてきた」[13] と表現している。確かに日本人は，単独者としてではなく，親しい間柄にあること自体に，それぞれの主体性を見いだしてきた。そこでは，他主体との組織化された行為連関の維持が容易に保たれるような形で，各「主体」が形成されている。そうした「主体」には，連帯的自律性が備わっていると考えてよい。

“ひと”が間柄性において考えられることは，日本語の慣用法からも明らかである。和辻哲郎が指摘したように，日本語においては，“ひと”は，自であるとともに他でもあり，世間・世人の意さえも含んでいるのである。すなわち，“ひとの物をとる”“われひとと共に”での“ひと”は，他者を指し，“ひとは言う”では世人一般を，“人聞きが悪い”では世間を意味する。そして“ひとのことを構うな”“ひとを馬鹿にするな”と言えば，相手の立場

から見た場合の他者，すなわち自分自身のことを指し示すのである。[14]「人間」という語もまた，同様のロジックから，日本語では，中国語での“世の中”“世間”という原義から転じて，そこにおける仲間内としての“ひと”を指すようになった，と言われている。[15] こうした転用は，社会とその構成員たる「個人」とを概念上区別する欧米人には，おそらく考えられない事柄であろう。だが日本人にとってそれが自明なことわりであるのは，“ひと”を対人脈絡のなかでしか想定しえない，東洋人の伝統的な「人間観」のせいであろう。

中国人もまた，日本人と同じく，“ひと”の観念に対人的連関性を内在化させてきた。そのことは，F・シューが指摘したように，中国語の「人（レン）」の用例からも明らかなところである。たとえば「好人（ハオレン）」（＝善人），「壊人（ファイレン）（坏人）」（＝悪人）という用語では，仲間うちで好感をもたれる人がよい人なのであり，人間関係をぶちこわすような人がいけない人なのである。また，「他不是人（タブシレン）」（あんなやつは人でなしだ）というフレイズでも，「人」は，社会的に受け入れ難い非人情な行動をとる者，という含意において用いられている。これらの諸例を通しても，「人」はつねに社会的成員としての適格性を問題にしていることが分かる。[16]

### 3） 自己意識と人柄（人間常相）

「個人」にあっては，対人関係に入る前に，パーソナルで不可侵的な自己の独自性が，ゆるがぬ核として設定されていよう。自己についての確かな実体感覚と，自己依拠的な態度（自らの力だけを頼りに進取的に行動し，その結果に対しては有責的 liable に対処すること）を保持することが，「個人」の存立要件である。こうした「個人」の中核部分は，従来「自我」と称されてきた。それは，“ある人自身の固有性（*propria persona*）”を示す概念である。そして自我意識としてのアイデンティティは，自らの独自性・能動性・同一性・連続性についての確信であるが，しかし同時に，生活における拠点（point of reference）をつねに自己自身に設定しようとする信条でもある。世界は自己のイニシャティブの下でしか動かないとする自負が，「自我」のなかにある。つまり，不動の自己のまわりを世界が回るという，トレミーの天動説にも似た世界観が抱かれやすい。こうした傾向は，「個人」の場合，主体形成におけるレファレントを自己自身に限定したことの必然的帰結である。

「個人」と対照化される「間人」は，「自我」の延長体でもなければ，また連結体でもない。そこでは，他者との一体感（時には対立的な感情）が先にあって，その対人感覚のもとで自己が確認されることになろう。こうした「間人」にとっての自己意識とは何であろうか。木村敏によれば，西洋人では「自分というものが，いついかなる事情においても，不変の一者としての自我でありつづける」。[17] これに対し，日本人のそれは，「自我」のようにつねに確立されてはおらず，対人連関のなかでその都度獲得されるような，流動的生活空間を意味している。すなわち，「セルフとは，いかに他人との人間関係の中から育ってくるものであ

っても，結局のところは自己の独自性，自己の実質であって，しかもそれがセルフと言われるゆえんは，それが恒常的に同一性と連続性を保ち続けている点にある。これに対して日本語の『自分』は，本来自分を越えたなにものかについての，そのつどの『自己の分け前』なのであって，恒常的同一性をもった実質ないし属性ではない」[18]とする。要するに，日本人の自己意識としての「自分」というものは，自主体の内部にある抽象的実体ではなく，「むしろ自分自身の外部に，具体的には自分と相手との間にそのつど見出され，そこからの『分け前』としてそのつど獲得されてくる現実性」[19]をいうのである。換言すれば，「自分」とは，自・他の両主体によって共有される現実の生活空間から，自らの置かれたそのときどきの状況に応じて，自らの側に配分された部分を指す，とみてよかろう。

この点をさらに私なりに敷衍してみよう。自・他の両主体の間で共有される生活空間は，自らの側に配分される「自分」と，相手の側に分与される部分――「自分」のサイドからは「他分」とでも名付けられる――とから成り立っている。しかもそうした「自分」と「他分」とは，各自の領域を確保して対峙し合うのではなく，共属する空間をもち（部分的に重なり合う），状況の変化やそれぞれの立場の変容に従って「分け前」の分配比を変えて行く。それゆえ両者は，互いに完全に独立した別個の「主体」ではない。両者間は共変的連関が保たれている。しかも，自らの存立の根拠を，少なくとも一部は他に負うているという意味で，共生的（symbiotic）な連関をもつ。「自分」も「他分」も，他なくしては主体化しえないのである。かくて木村もいうように，「……日本人にあっては，自己は自己自身の存立の根拠を自己自身の内部に持っていない」[20]ということになろう。だから，「……日本では『私』が誰であり，『汝』が誰であるかは，けっしてそれ自体で決定していることではなくて，そのつどの『私』と『汝』との間，つまり人と人との間のあり方によって，そのたびごとに改めて規定されなおされる」[21]のである。このことは，「間人」が関係性の対象化を通じて「関与的主体」として形成される，ということと同義である。

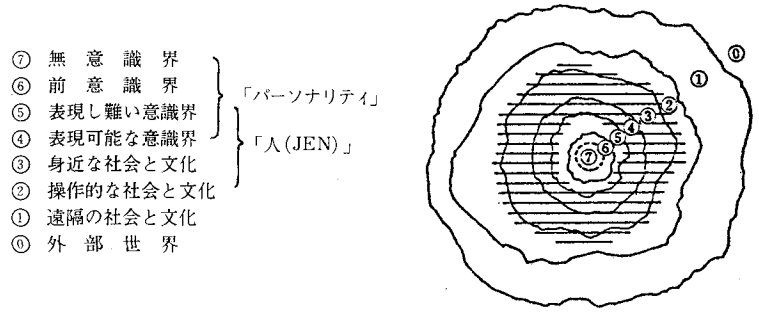
自立的・独自的な主体意識としての「自我」と較べれば，「自分」が相関的・相対的な性格を帯び，したがってまた，その持ち主が，他主体に対して依存的であり（土居健郎のいう「甘え」への傾向が強い），かつ人格的に未成熟である，と見なされやすい。しかし実際にそこでは，「甘え」のような他者への一方的依存ではなく，相互依存性が眺められる。しかも両主体間の相互依存が保たれるためには，当人の恣意的な欲求充足は，意図的に制御されなければならない。社会システムの側からは，たえずこの種の自己制御の要請が出されているはずである。だとすれば，互いの間での自己制御は，実は社会的に十分成熟した大人の行動形態だと言うべきであろう。むき出しの「自我」の主張こそ，社会生活ではむしろ子どもじみている。このように考えると，日本人の「自分」は，社会的に制御し合う，しかも互いに依存し合う自己についての意識だということになる。そして「間人」は，「自分」という

自意識を宿し，かつそれに支えられた存在だ，と言えよう。

ところで“人柄”という語は，「主体システム」の全体的特徴（パターン）を示すのに適していると考えられるが，これまでは普通，「パーソナリティ（personality)」という概念が，それ用に使われてきた。だがそれは，「単独的主体」だけをレファレントとして設定されていたように思われる。そのことは，たいていの概念定義において，「個人のなかにあって」とか，「個人にかかわる」という限定語句が入っていることからも明らかである。実際，パーソナリティ研究においては，「自我」という心的実体を中核部分に措定した上で，それの調整・実現・維持のダイナミクスが論じられることが多かった。マディは，従来のパーソナリティ理論を，上記の三機能のいずれかに重点をおく，(a)葛藤モデル，(b)成就モデル，(c)一貫性モデル，の三つに分類・整理することを試みている。[22]

しかし「関与的主体」にまでレファレントを広げた場合，「パーソナリティ」は，“人柄”をとらえる概念としては不適切である。その際には，F・シューが新しく提案した「人（レン）(JEN)」という分析概念が有効であろう。シューによれば，“ひと”は，社会生活において，いつも他者や文物との良好な心理=社会的ホメオスタシス（psychosocial homeostasis）を維持しようとする，動的均衡過程のなかにある。ところで人柄というのは，個々人が生涯にわたって社会や文化とどのような相互作用を営んだかの軌跡のようなものであり，それを分析的にとらえる場合には，心理=社会的ホメオスタシス過程のなかに存する，比較的恒常的なパターンを析出すればよい，とする。シューは，その恒常的な局面を「人間常相（human constant)」と名付け，それを“人柄”の一つの構造的表明だと考えている。「人」というのは，「パーソナリティ」ではとらえきれない「人間常相」を記述するための一つの操作概念なのである。[23]

シューの説明に従えば，生活空間の構造図（第1図参照）において，「パーソナリティ」は，中心部に位置する，フロイディアン的な「無意識・前意識⑦⑥」と，その外縁部の「表




**第1図　人間の心理社会図**（F. L. K. シュー）

現し難い意識界⑤」「表現可能な意識界④」とによって構成される。これに対し「人」は，「表現可能な意識界④」と，さらにその周りにある「身近な社会と文化③」を中核にして成り立つとする（図の横線部分）。要するに「人」というのは，何事も許し合える身近な人たち（家族や親友）との親交と，慣れ親しんだ生活様式や愛好する文物，また伝達可能な意識内容などを含む，社会＝文化的な常相空間を指している。[24] それは明らかに対人関係をも含んでいる。したがって，対人脈絡のなかに生き，間柄を対象化する「関与的主体」としての「間人」の“人柄”は，シューのいう「人」によらなければ，十分には把握しえないであろう。

## II　日本人の「間柄」

すでに述べたことからも明らかなように，「単独的主体」と「関与的主体」とでは，対人的連関（対人脈絡）に対する認識と対処の仕方が大きく異なる。前者では，主体化のレファレントを自己自身だけに限定するために，連関性自体は，独我的な「主体システム」から切り離され，たんに外在する客体の一つとして眺められる。つまり，主体=客体の連結体もまた，新たなる客体となる。自己を絶対視する「個人」という「単独的主体」にとっては，それは自己からの派生体であるにとどまる。そのような対人関係は，自主体の維持存続を確保するための，操作可能な，一種の社会技術の対象と見なされる。対人関係の調整を目的とする各種の臨床的技法とか，戦略的なゲーム理論には，こうした対人関係の手段視という前提が潜んでいよう。

これに対して，後者の「関与的主体」においては，対象化するレファレントを，主体と客体（他主体を含む）との関係性に設定する。そのために，対人脈絡そのものが「主体システム」の構成要因となる。したがってまた，自主体と対人関係とが乖離することもない。そこには，“脈絡人”とでもいうべき主体形態がある。その呼び名としての「間人」は，むしろどちらかといえば，間柄的な「主体システム」に内在する一つの補完体だと見なされる。実際，関係のネットワークそれ自体は，自律性をもった一つの社会的現実なのである。そうした「関与的主体」は，村上・公文・佐藤のいう集団主体「惣」を形成しよう。そのような「惣」主体もしくはそこにおける間柄は，「間人」にとっては，合一すべき自己目的となる。それらは，自己自身と同じぐらい大切な生活基盤であり，それゆえ既存の間柄の保有と充実が，無条件で求められるであろう。たとえば，日本の組織の基本主体たる「課」，あるいは伝統的なインフォーマル組織である「学閥」における親しい間柄は，その成員にとっては“生きがい”そのものなのである。しかも「間人」たちによって構成される組織においては，業務の遂行にもまして，互いの間柄の維持・発展が重視される。「間人」にとって日常的な

“間柄”は，即自的な値打ちをもち，それへの全面的なコミットメントがはかられることになる。

### 1) 「社会関係」と「間柄」

このように「単独的主体」と「関与的主体」とでは，対人連関へのコミットの仕方が大きく異なる。アナロジカルに表現すれば，前者では，同一平面上に存在する任意の二つの“点”が，直線あるいは曲線の形で連結されるような関係性である。これを「局所(点)間連結」と名付けておこう。これに対し，後者の主体形態においては，たとえて言えば，最初から何らかの意味で所与的な相関があると考えられた“点”間が，それを含む“線”の交差によって連繋を保っている，とでも表現しえようか。より正確には，所与の相交わる二つの“線”上に配置されたそれぞれの“点”（それはここでは微小な線分と見なした方がよい）どうしが，“線”を介して間接的に相互連接している，といった関係性を示す。その場合，当然のことながら，交差する“線”が平面を構成する基本単位（要因）となる。それはちょうど，前者の関係性において，自由に独立した位置を設定しうる二つの“点”が，その基本単位であるのと同じである。だが，前者では，そうした“点”間の直接の結びつき，すなわち“線分”が関係性を構成するのに対し，後者においては，“点”（局所）を含む“線”相互間の連関が，関係性の第一義となる。したがって，“関係性”とはいっても，その構成次元は異なっている。後者の“線”間連関は，一つのネットワーク（非局所的な“場”field）を織り成すことになり，交差する所与の“線”上の“点”どうしも，“場”（状況 situation）との対応において相関し合うに至る。

こうしたアナロジーが妥当だとすれば，「単独的主体」としての「個人」は，自らに外在する局所間連結としての対人連関をもつ，と言えよう。他方，「関与的主体」の体現者としての「間人」は，非局所的な“場”において，“線”間連関に内在化されたまま関係をもち合うことになる。もっとも，内在化（内包）されているとはいっても，氏族社会やバンド（band）におけるような，連関性のなかに埋没した（間柄と個体性とが分立していない）「素人」（村上らの用語）とは異なり，「間人」は，たとえば日本のイエ型社会でのように，「新たな間柄形成の自覚的な主導者ともなりうる」可能性をもつことに留意することが必要であろう。[25]

ところで，これまで社会学や社会心理学で一般概念として用いられてきた「社会関係」は，ここでいう「局所間連結」を前提にしている。定義上それは，「個人」間の相互作用（interaction）において，互いに相手に対する期待が適合し合い，社会的行為の交換が安定した状態にあることを指すものとされる。だがそれは，交換の安定した状態だという規定にとどまらず，「持続的に営まれる相互作用の規範化された様式」[20] と定義されることもある。そう

した場合には，どのような“規範化された様式”が一般化されているのであろうか。そして行為者どうしが期待し合い，また規制し合う相互作用で，何がいったい様式化されるのだろうか。恐らくそこにあるのは，交換における平等な互酬性（reciprocity），すなわち等価交換性ということであろう。「単独的主体」にとって「局所間連結」の必要条件は，交換におけるそれぞれのシステムの利得（gains）を，同時にかつ平等に確保することである。この場合，利得とは，報酬（reward）と費用（cost）との正の差を指すことは言うまでもない。この利得の平準化によって，初めて各人の行動主体性が保たれ，スムーズな相互作用が行なわれることになる。等価交換性は，明らかに「社会関係」の要件となっている。

「個人」間の連関がこのような「社会関係」によって把握されるかぎり，それが手段的に眺められ，取引き（transaction）だと見なされるのは，むしろ当然というべきであろう。そこでは情愛（affect）抜きの役割（role）的な関係が優先する。A・クーンは，そうした取引きを，「価値に基礎をおく相互作用（value-based interaction）」と名付けて，以下のようにモデル化している。[27]

取引き者A，Bが，それぞれ選好し，所有する財（物財またはサービス能力）をX，Yとする。そしてAがYを，BがXを入手したいと望んでいるものとする。その取引きは，AとBのシステム状態が一定の条件を満たすとき遂行される。X・Yがともに分割不能なものである場合には，AとBが互いに逆の選好順序をもつとき（AはXよりもYを，同時にBはYよりもXを選好）にのみ，取引きが成立する。すなわち$AY-AX \geqq 0$，かつ$BX-BY \geqq 0$であれば取引きが可能である（AY：AのYに対する選好，AX：AのXに対する選好，BX：BのXに対する選好，BY：BのYに対する選好）。なおAY－AXというのは，AのYに対する正味の選好度（net preference）を示しており，それはAの有効選好（effective preference）と呼ばれる。すなわち，AYは，AがYを獲得することで受け取りたいと思っている利益を指し，AXは，Yの獲得に伴うAの費用を意味するから，両者の差が，取引きに応じようとするAの意思決定（選好）の要因を構成することになる。この場合，AがYを入手するためにXを手放すことができれば，Aの抱く願望が初めて“有効”となるのである。Bの有効選好については，Aの場合と対称的である。

ところで取引きは，一般的に眺めれば，A・Bそれぞれの有効選好に依拠するが，実際には，相手の出方次第で決まってくるような，かなりコンティンジェントな相互作用なのである。取引きが成立するためには，最初，AまたはBが設定する有効選好値の上限と下限との間に，相手のそれの上限値と下限値とがはまり込んでいるか，あるいは少なくとも両者の上限値が等しくなくてはならない。普通は，両者の共通する上限値と下限値の中間点で，AY—AXとBX—BYとが等価であることが確認され，XとYとが交換されるに至る。特別な場合には，両者間の取引きはゼロ・サム・ゲームを構成するが，当事者がともに充足さ

れているかぎりにおいては，一般には，双方とも利益があったと考えるような positive-sum game を行なうのである。XまたはYがサービスの場合，その授受において，一方の与えたものと他方の受けとったものとは必ずしも同じ値打をもたないから，結果に関して明確なことは言えない。だが，こうした取引きに際して，当事者は，つぎの二点を前提にしていることは確かである。(a)各当事者は，取引きにおいて，自己自身の利益を極大化する（できるだけ少なく手放して，なるだけ多く受取る）ことに努め，利益が費用に等しくなるか，費用の方が上回ってしまうと，交換を止めようとする。(b)各当事者は，相手の立場には無関心であり，相手を痛めつけようとか助けようとかは思わない。つまり，取引きモデルにおいては，利己的で無関心的な（selfish-indifferent）態度が支配的である。

以上のクーン・モデルは，経済取引きを念頭においてはいるが，一般の社会的行為の交換（相互作用）のプロセスと条件を明確に定式化している。機能的でかつ合理的な「社会関係」を説明する理論としては，明快であり申し分がない。ただここで留意しておかねばならないのは，このモデルが，「単独的主体」を拠点に据えた「局所間連結」理論の典型だという点である。したがってそれが「関与的主体」に対して適用しうるかどうかは疑問である。

すでに述べたように，「関与的主体」にとっての人的なつながりは，非局所的な“場”の構成要因としてとらえられる。すなわち，対人関係は，個体間の意図的な出会いや取引きから生じるのではない。むしろ最初に無限大の規模をもつ対人的連鎖（ネットワーク）を想定した上で，そのサブ・システムとして特定者間の関係が眺められるのである。そうした対人脈絡は，それ自体として完結した“線分”なのではなく，同一平面上の他のもろもろの“線”と相関し，それらからの直接・間接の影響を受けている。そうした網目状の“線”に内在化している「間人」間のつながりも，かなり相対的な性格のものとなる。古来日本人は，〈縁〉という観念によって，そのような相関性を表明してきた。〈縁〉という広大な連続性をもった人的因果連鎖システムのなかで，人と人とのサブ・システム的な接合が生じたとき，それを“間柄”と称してきたのである。

「個人」間の互酬的な相互作用に基づいて「社会関係」が形成される場合には，相互間が非連続であるがゆえに対人関係が設定される，という基本認識がある。つまり，非連続の連続化としての関係の設定である。他方，〈縁〉に基づく「間人」間の“間柄”では，相互間が所与的に連続しているという基本認識の下で――その連鎖の全体システムを合理的に認知するのは不可能ではあるが――，連鎖システムの一部分を特定するという形で，相互間の関係が確認される。いわば連続の非連続化によって個別の関係が抽出されるのである。日本人に特徴的なこうした関係性は，もはや「社会関係」という語では呼ばれえない。そこで「間柄」を，〈縁〉のような非局所的な“場”を表象する観念の下で取り結ばれる関係を指すタームとして採択しよう。この「間柄」の集積体が“世間”である。

村上・公文・佐藤が述べたように，日本人の基本的存在形態は，「はじめに言葉ありき。言葉は神と共にありき。言葉は神なりき。」（ヨハネ伝福音書）になぞらえて言えば，「はじめに人々ありき。人々は間柄と共にありき。人々は人間なりき。」と表現しうるようなものなのかも知れない（もっとも，ここで“人間”は，“じんかん”とも読まれうるであろうが）。[28] 日本人にとって「間柄」は，一種の神性さえ帯びるのである。

### 2) 「間柄」の基本属性

「間柄」の構造は，「社会関係」が「個人」間の交換過程（相互作用）から説明しえたようには，解析されえない。「間人」間のコンティンジェントな交渉はありうるかも知れないが，そこでは等価交換が自明だとはされていないし，したがってまた，当事者どうしが完全に分立しているわけでもない。その相互作用は，むしろ逆に，当事者どうしがすでに相関的に関与し合っている，という前提のもとで究明されよう。

森有正によれば，日本人の場合，“経験”は，一人の個人ではなく，二人の人間の構成する関係を定義する，という。この指摘は，日本人が主体=客体間の関係性を対象化する傾向をもつ，という事実の別の表現だと言ってよい。[29] 森は，その際の二人の間の関係について，「……『日本人』においては，『汝』に対立するのは『我』ではないということ，対立するものも亦相手にとっての『汝』なのだ，ということである」，と重要な指摘を行なった。たとえば，「汝」としての親に対する子は，「我」なのではなく，「汝」である親の「汝」としての自分を経験している。「肯定的であるか，否定的であるかに関係なく，凡ては『我と汝』ではなく，『汝と汝』との関係の中に推移するのである」とも述べる。[30]

森のいう「汝の汝」は，経験する主体を，ストレートな自我ではなく，それをいったん相対化して，相手にとっての客体という形で設定したものであり，日本人の関係意識を的確にとらえた表現だと言える。これと同じように，社会的客体への志向に際して，日本人は相手の側に基準点を設定しようとするのが通例である。つまり，相手の立場に立って行動する「アウトサイド・イン（outside-in）の原理」に従っている。[31] この傾向もまた，「間人」における関与的な接合の特性を示すものであろう。

このような関与的接合として対象化される「間柄」は，それ自体「主体システム」として自立する。ではそれは，主体としてどのような特徴を示すであろうか。この点については，村上・公文・佐藤が，つぎのような四つの主体属性を指摘している。それはまた，「関与的主体」の基本的特性とも見なしうるであろう。(1)間柄は，それぞれに境界をもつ。二つの個体が出会ったとき意識される同質性・異質性は，それぞれの属する間柄が共通であるか違っているかに基づく。(2)各個体は，同時に相異なる間柄に属しうるが，一体感を特に強く抱くような少数の間柄をもつ，(3)間柄には，それに属する個体の行為を拘束するような固有の

“心”（意志・情感）をもつ。それは内部成員にとっては“気”や“空気”として感じられる。また固有の手段を所有し使用する。(4)間柄は，分け前として各個体に割り当てられるような種々の「分」をもつ。たとえば，「気分」（間柄自体の“気”が成員に分有されたもの），「職分」（主体としての間柄の活動が，“職”として分割され，成員に割り当てられたもの），「身分」（“職”につく資格が各成員に付与されている場合）。[32] なお公文は，「間柄」に帰属する成員としての「間人」を確定するには，(イ)当人が帰属する間柄，(ロ)その間柄における当人の「分」，(ハ)当人が間柄を離れてもつ個性，の指定が必要だとする。[33]

「分」に応じて「間柄」に帰属するそれぞれの「間人」どうしのつき合い方は，「社会関係」でのそれとかなり異なる。後者では，機能的な役割関係で相互が結びつくのだから，面識の有無は問題とならない。だが「間柄」においては，「分」についての事前の相互確認が不可欠である。そして相手が自分にとって役立ちうるか否かよりも，相手が気に入るかどうかによって，関係の度合いも変わる。岩田龍子が，日本人の対人関係をつぎの三類型に分けたのも，恐らくこの観点に基づいていよう。(a)無縁の関係（互いに無関心な赤の他人どうしの場合），(b)なじみの関係（人柄や気心が知れていて，互いに道義的な期待をもち合うような間柄），(c)気のおけない関係（相手の好意を当てにすることができ，しかも無理が言える親密な間柄），以上の三つである。[34] 心情的要因が強く作用する「間柄」にあっては，交換の形態も，「社会関係」でのような同時的な等価交換は必ずしも要請されない。むしろ，相互の信頼に基づく，信用貸借型もしくは思い遣り先行型の交換が一般的であろう。「恩」や「義理」は，そうした交換にかかわるモラルの側面だと見なされる。

### 3) 「間柄」の活性化

すでに述べたことからも示唆されるように，「個人」にとって頼みとなしうる存在は，自己自身に限定される。他者との関係は，頼みの綱なのではなく，むしろ自らのために活用すべき一種の財だとされる。それは処分可能な客体であり，無条件で尊ばれるべきものとは考えられていない。うまく樹立されたと思った関係も，次の日には，相手の恣意的判断によって，もろくもついえ去るかも知れないのである。この不安定性をカバーするには契約に依拠せざるを得ない。だがそれとて守られるという保証はない。もっとも，契約不履行に対する損害賠償責任が厳しく追求されるから，[35] 何とか履行されるとも言える。

これに対し，他者との相互包摂的なかかわりのなかで自らの行動主体性を保とうとする「間人」の場合，対人的な意味連関が即「自分」として意識される。したがって，「個人」でのように，人倫をプラス・マイナスで戦略的に評価し，操作的に処理することは，「自分」の自己否定に通じる。いったん取り結ばれた「間柄」は，自己自らの確立された「主体システム」として，できるかぎり維持されなくてはならない。その意味において，「間柄」に共

属する人たちは，互いに安定した関係を保ちうるはずである。ここに「間柄」のもつ最大のメリットがある。

原子が数個結合して分子を作るとき，物質としての安定度が大きい（アルゴン Ar 元素のような，不活性性の一原子分子は例外）。公文俊平は，この事実とアナロジカルに，欧米の自主的な「個人」が，他元素と結合し難い一原子分子であるとすれば，日本人のひとりひとりは，ある関係に入ることによって初めて安定する存在である，すなわち容易に分子化する人たちだ，と述べている。[36] 換言すれば，「間人」という元素は，「間柄」という分子状態において，安定した「主体システム」を保っているわけである。こうしたアナロジーからしても，公文が指摘するように，「間柄」には，「間人」間の関係の構造とそれに帰属する個々の「間人」とが，同時に含まれることになろう。[37] 「間柄」の集積体としての日本の組織が非常に安定しているのも，この点から言って十分に理由のあることなのである。

「社会関係」と較べると安定性の高い「間柄」では，関係の維持に力を入れる必要はあまりない。その分，自らを活性化するフィージビリティが高まることだろう。その場合，有効性を高めるために関係を人為的に操作することは，逆効果をもたらす。活性化に必要な要件は，(1)よく話し合って互いに同じ「間柄」に属する「間人」どうしであることを再確認する，(2)相手を信頼し，理解し合おうとする努力，(3)相手に対する思い遣りや相手の立場の尊重，(4)「分」をわきまえ，相手との協調・妥協をはかる，などである。これらの要件は，関係性の客体視を通じて主体化を達成しようとする関与的“にんげん”にとっては，“対象化”を行なう際のごく普通のポイントでもある。「間人」たちがそれらに十分な配慮をしさえすれば，「間柄」は良好に維持もしくは活性化されることであろう。

このような活性化の方策は，古くから日本人が用いてきたものである。たとえば，馬場正方（杉羽）の作と伝えられる『日暮硯』（宝暦11年）に記されている，信州松代藩の勘略奉行，恩田木工民親の藩財政立て直しの方式が，その典型例である。その際，成功の決め手となったのは，適切な改善策（前納または未納の年貢や用立金に対する措置）それ自体よりも，むしろ人間関係的側面における独自の対処法である。恩田は，まず第一に，藩士（役人）や領民（百姓・町人）との相互信頼関係の樹立に努力する。家族もろとも生活を徹底的に簡素化することによって，言行不一致のそしりを招かないよう留意するとともに，役人の知行を保障することでいっそうの奉公を促し，また領民には，触れ出しの勝手な変更はしないことを約して，事態改善のための依頼事項の履行を求めた。皆に向って恩田は言う。「さて又，向後は手前と皆の者どもと肌を合わせて，萬事相談してくれざれば勘略も出来申さず，手前の働きばかりにては勤まらず候間，何事も心やすく，手前と相談して呉れよ。これが第一，手前が皆への頼みなり。さて此の上に，皆々が不得心なれば，手前が役儀も勤まらず候間，切腹致すより外はこれなく候。依って，手前に首尾よく役儀勤めさせてくれるも，又切腹させ

るも，皆々の料簡次第に候間，如何致し候や，皆々の所存を聞き度候。」[38] このように恩田は，自分の身柄を領民にすっかり預けることによって，相互間に絶対的な信頼と依存のきずなが生まれることを期待したのである。

さらにまた，年貢米の未納者と，その未進を黙認した役人をきつく叱りつけた後に，「斯く云ふは理窟といふものなり」と改めて理解を示し，未納者には，難儀な事情があったためであろうと気の毒がり，また役人もその事情をよく承知していたゆえの仁政であったと，その処置を容認する。[39] この点は，相手の立場に立って考えることが，よりよい結果をもたらすことを確信していた事実を物語っている。恩田は，このような対処によって，「間柄」の活性化をはかり，見事に藩の行政改革を成功させたのだった。

「間柄」を活性化させるための前述のような要件が，現代の日本人においても，恩田と同じように意識されているようである。筆者の行なった生活価値観についての調査（昭和54年に，大阪・名古屋・平塚・福島などの企業約20社，4200名を対象にして行なった）に含まれた，文章完成法テスト（以下 SCT と略記する）のデータからも，その事実が推測される。同テストでは，10個の未完成文を用いたが，そのなかの一つに「ひととうまくやっていくには……」という項目がある。この項目の，全調査対象者についての集計が完了していないので，ここでは4社分（772名）についてだけ，その結果を眺めてみよう。記入された文章の内容分類は，第1表のとおりである。また各カテゴリーの具体的表現は，第2表に記したとおりである。

「相互の話し合いや相手の理解」，「相手への思い遣りや相手の立場の尊重」，「相互間の信頼や相手に対する誠実さ」，「自己抑制や相手に対する協調性」などのカテゴリーが，20〜10％の構成比を示している。これらはいずれも，前述の「間柄」の成立要件に即したものであり，日本人の重視するポイントが何であるかを教えている。また，こうした活性化への方策は，「社会関係」におけるような，戦略的なかけひきによって自己に有利な結果をもたらそうとする操作（manipulation）とは，基本的な性格を異にしている。たとえば，クーンは，取引きでの戦術（tactics）として，Aが自己自身の「有効選好」を隠すか偽り伝えるかして，Bのそれがどの程度のものであるかを探り出そうとする技法を挙げている。[40] だが今回の SCT データでの方策には，そのような戦術的な対処法は，まったく存在しない。全体として眺めれば，自分の利得を度外視してでも，相手に十分な配慮をすることの方が大切だ，と考える人が多数を占める。そこには，平等な互酬性を確保するための工夫が，対人関係の維持にとっては不可欠である，といった判断は見られない。

要するに，この SCT データに関するかぎり，相手に対する自分自身の認識態度が，良き「間柄」を作り出す決め手であって，相手に対して何らかの戦略的な働きかけをすることは，重視されていないことが分かる。「自己表出」「相手への積極的接近」でさえ，そのパーセン

第1表　文章完成法（SCT）—「ひととうまくやっていくには……」の回答分類　　（　）はパーセント

| | A社（電線メーカー・平塚市） | B社（自動車部品メーカー・福島県） | C社（広告代理店・大阪支社） | D社（電鉄会社・大阪市） | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| (イ) 思いやり・相手の立場の尊重 | 34(20.7) | 23(20.0) | 58(28.1) | 53(18.5) | 168(21.8) |
| (a) 思いやり・相手の気持の理解 | 16( 9.8) | 11( 9.6) | 22(10.7) | 13( 4.5) | 62( 8.0) |
| (b) 相手の立場に立つこと | 18(11.0) | 12(10.4) | 36(17.5) | 40(13.9) | 106(13.7) |
| | ～20才 2<br>21～25 7<br>26～30 9<br>31～40 9<br>41～ 7<br>男 26<br>女 8<br>N.A. 0 | ～20才 6<br>21～25 10<br>26～30 1<br>31～ 5<br>N.A. 1<br>男 13<br>女 9<br>N.A. 1 | ～20才 0<br>21～25 8<br>26～30 6<br>31～35 12<br>36～40 8<br>41～ 22<br>N.A. 2<br>男 43<br>女 13<br>N.A. 1 | ～20才 0<br>21～25 2<br>26～30 9<br>31～35 14<br>36～40 8<br>41～ 19<br>N.A. 1<br>男 52<br>女 0<br>N.A. 1 | |
| (ロ) 信頼・誠実 | 14( 8.5) | 12(10.4) | 17( 8.3) | 38(13.2) | 81(10.5) |
| (a) 相互信頼 | 9( 5.5) | 8( 7.0) | 6( 2.9) | 20( 7.0) | 43( 5.6) |
| (b) 誠心誠意 | 5( 3.0) | 4( 3.5) | 11( 5.3) | 18( 6.3) | 38( 4.9) |
| | ～20才 1<br>21～25 1<br>26～30 2<br>31～40 6<br>41～ 4<br>男 12<br>女 2<br>N.A. 0 | ～20才 4<br>21～25 2<br>26～30 2<br>31～ 2<br>N.A. 2<br>男 7<br>女 3<br>N.A. 2 | ～20才 0<br>21～25 0<br>26～30 2<br>31～35 3<br>36～40 2<br>41～ 10<br>男 16<br>女 1<br>N.A. 0 | ～20才 1<br>21～25 1<br>26～30 5<br>31～35 9<br>36～40 2<br>41～ 18<br>N.A. 2<br>男 37<br>女 0<br>N.A. 1 | |
| (ハ) 自己抑制・譲歩 | 26(15.9) | 14(12.2) | 29(14.1) | 43(15.0) | 112(14.5) |
| | ～20才 2<br>21～25 4<br>26～30 5<br>31～40 14<br>41～ 1<br>男 22<br>女 4<br>N.A. 0 | ～20才 8<br>21～25 2<br>26～30 1<br>31～ 2<br>2N.A. 1<br>男 4<br>女 9<br>N.A. 1 | ～20才 0<br>21～25 1<br>26～30 3<br>31～35 5<br>36～40 6<br>41～ 11<br>N.A. 3<br>男 22<br>女 4<br>N.A. 3 | ～20才 0<br>21～25 2<br>26～30 4<br>31～35 10<br>36～40 4<br>41～ 20<br>N.A. 3<br>男 39<br>女 2<br>N.A. 2 | |
| (ニ) 自己卑下・相手に対する尊敬・自己の人間形成 | 12( 7.3) | 7( 6.1) | 7( 3.4) | 12( 4.2) | 38( 4.9) |
| | ～20才 1<br>21～25 0<br>26～30 1<br>31～40 7<br>41～ 2<br>N.A. 1<br>男 10<br>女 1<br>N.A. 1 | ～20才 1<br>21～25 2<br>26～30 2<br>31～ 2<br>男 4<br>女 3<br>N.A. 0 | ～20才 0<br>21～25 1<br>26～30 2<br>31～35 2<br>36～40 1<br>41～ 1<br>男 6<br>女 1<br>N.A. 0 | ～20才 0<br>21～25 2<br>26～30 1<br>31～35 4<br>36～40 2<br>41～ 3<br>男 12<br>女 0<br>N.A. 0 | |

| | A社（電線メーカー・平塚市） | B社（自動車部品メーカー・福島県） | C社（広告代理店・大阪支社） | D社（電鉄会社・大阪市） | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| (ホ) 相手との協調・協力・妥協・和・日ごろのつき合い | 14( 8.5)<br>～20才 1<br>21～25 1<br>26～30 2<br>31～40 3<br>41～ 6<br>N.A. 1<br>男 10<br>女 3<br>N.A. 1 | 12(10.4)<br>～20才 7<br>21～25 2<br>26～30 0<br>31～ 0<br>N.A. 3<br>男 5<br>女 4<br>N.A. 3 | 18( 8.7)<br>～20才 0<br>21～25 1<br>26～30 3<br>31～35 4<br>36～40 2<br>41～ 8<br>男 17<br>女 1<br>N.A. 0 | 35(12.2)<br>～20才 1<br>21～25 1<br>26～30 5<br>31～35 6<br>36～40 3<br>41～ 19<br>男 33<br>女 2<br>N.A. 0 | 79(10.2) |
| (ヘ) 話し合い・相互理解・飲酒 | 36(22.0) | 23(20.1) | 39(18.9) | 69(24.0) | 167(21.6) |
| (a) 話し合い・会話 | 14( 8.5) | 19(16.5) | 11( 5.3) | 31(10.8) | 75( 9.7) |
| (b) 相互理解・相手の話を聞く | 19(11.6) | 4( 3.5) | 26(12.6) | 35(12.2) | 84(10.9) |
| (c) 共同飲酒 | 3( 1.8) | 0( 0) | 2( 1.0) | 3( 1.0) | 8( 1.0) |
| | ～20才 1<br>21～25 3<br>26～30 10<br>31～40 17<br>41～ 4<br>N.A. 1<br>男 31<br>女 4<br>N.A. 1 | ～20才 8<br>21～25 5<br>26～30 3<br>31～ 4<br>N.A. 3<br>男 15<br>女 5<br>N.A. 3 | ～20才 0<br>21～25 2<br>26～30 5<br>31～35 5<br>36～40 8<br>41～ 18<br>N.A. 1<br>男 33<br>女 5<br>N.A. 1 | ～20才 1<br>21～25 4<br>26～30 12<br>23～35 18<br>36～40 4<br>41～ 28<br>N.A. 2<br>男 66<br>女 1<br>N.A. 2 | |
| (ト) 自己表出・積極的接近 | 4( 2.4) | 5( 4.3) | 7( 3.4) | 15( 5.2) | 31( 4.0) |
| | ～20才 0<br>21～25 2<br>26～30 1<br>31～40 1<br>41～ 0<br>男 4<br>女 0<br>N.A. 0 | ～20才 3<br>21～25 0<br>26～30 0<br>31～ 1<br>N.A. 1<br>男 4<br>女 0<br>N.A. 1 | ～20才 0<br>21～25 3<br>26～30 1<br>31～35 1<br>36～40 1<br>41～ 1<br>男 6<br>女 1<br>N.A. 0 | ～20才 0<br>21～25 2<br>26～30 6<br>31～35 1<br>36～40 0<br>41～ 6<br>男 15<br>女 0<br>N.A. 0 | |
| (チ) プライバシーの尊重・深入りの回避 | 0 | 4( 3.5) | 4( 1.9) | 0 | 8( 1.0) |
| | | ～20才 0<br>21～25 2<br>26～30 1<br>31～ 1<br>男 4<br>女 0<br>N.A. 0 | ～20才 0<br>21～25 0<br>26～30 1<br>31～35 0<br>36～40 1<br>41～ 1<br>N.A. 1<br>男 2<br>女 2<br>N.A. 0 | | |

| | A社（電線メーカー・平塚市） | B社（自動車部品メーカー・福島県） | C社（広告代理店・大阪支社） | D社（電鉄会社・大阪市） | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| (リ) その他 | 11( 6.7)<br>～20才 0<br>21～25 1<br>26～30 2<br>31～40 2<br>41～ 4<br>N.A. 2<br>男 9<br>女 0<br>N.A. 2 | 8( 7.0)<br>～20才 1<br>21～25 3<br>26～30 0<br>31～ 4<br>男 6<br>女 2<br>N.A. 0 | 18( 8.7)<br>～20才 0<br>21～25 3<br>26～30 6<br>31～35 5<br>36～40 4<br>41～ 0<br>男 13<br>女 5<br>N.A. 0 | 20( 7.0)<br>～20才 0<br>21～25 1<br>26～30 2<br>31～35 8<br>36～40 1<br>41～ 7<br>N.A. 1<br>男 19<br>女 0<br>N.A. 1 | 57( 7.4) |
| (ヌ) 否定的見解・疑問視 | 8( 4.9)<br>～20才 0<br>21～25 1<br>26～30 5<br>31～40 1<br>41～ 1<br>男 8<br>女 0<br>N.A. 0 | 0 | 7( 3.4)<br>～20才 0<br>21～25 1<br>26～30 1<br>31～35 2<br>36～40 2<br>41～ 1<br>男 7<br>女 0<br>N.A. 0 | 1( 0.3)<br>～20才 0<br>21～25 0<br>26～30 0<br>31～35 1<br>36～40 0<br>41～ 0<br>男 1<br>女 0<br>N.A. 0 | 16(2 .1) |
| (ル) 無記入・意味不明 | 5( 3.0)<br>～20才 0<br>21～25 0<br>26～30 0<br>31～40 1<br>41～ 1<br>N.A. 3<br>男 3<br>女 0<br>N.A. 2 | 7( 6.1)<br>～20才 2<br>21～25 5<br>26～30 0<br>31～ 0<br>男 6<br>女 1<br>N.A. 0 | 2( 1.0)<br>～20才 0<br>21～25 0<br>26～30 0<br>31～35 0<br>36～40 0<br>41～ 2<br>男 2<br>女 0<br>N.A. 0 | 1( 0.3)<br>～20才 0<br>21～25 0<br>26～30 0<br>31～35 1<br>36～40 0<br>41～ 0<br>男 1<br>女 0<br>N.A. 0 | 15( 1.9) |
| 計 | 164(100) | 115(100) | 206(100) | 287(100) | 772(100) |

第2表　文章完成法（SCT）――「ひととうまくやっていくには……」の回答表現例

(イ) 思いやり・相手の立場の尊重

(a) 思いやり・相手の気持の理解

「思いやりの心がなくては駄目だ」「おもいやり」「相手の気持ちを考えて行動することが大切だと思う」「相手の気持ちを分ってやることだ」「まず自分を考えるまえに人のことを考えてやることだ」「相手のことを親身になって考えなければならない」「相手の気持ちをくんで行動することであろう」「相手を思いやることが大事」「自分の事ばかりでなく相手の事も考える」「言い方一つでも人を傷つける場合があるので思いやりが大切」「相手の心情をくみとることである」「相手の事を大事にする気持」「相手の気持になっておもいやりを持って接することだと思う」

(b) 相手の立場に立つこと

「相手の立場になって考えてあげることが必要だ」「相手の立場を考えること」「わがままを出さず相手の立場で物事を考えることが必要である」「たがいに相手の立場にたって物事を考えてやる」「他人の立場になってものを考え自分のいやなことは他にも及ぼさないようにする」「自分の考えをそのまま行動にうつすのではなく常に相手の立場を考えてやっていく」「相手の身になって考えてあげること」「常に相手の立場に立って物事を考えてみる事だ」「お互いの立場を」「相手の立場になって対応することだ」「利害関係を無視し相手の立場にたつこと」「相手の立場にたって考え、協調していく方針が大切」「相手の立場になって考え、多少自分を犠牲にしなければいけないと思います」

(ロ) 信頼・誠実

(a) 相互信頼

「相互信頼」「信頼しあうこと」「相手のことを信頼する」「信頼が大切だ」「信頼関係」「互いに信じ合うことだ」「信用・信頼関係で結ばれること」「互いの信頼といたわり」「相手を信頼し尊重することだ」

(b) 誠心誠意

「自分の誠実さで事に当ってゆくこと」「誠心誠意で事にあたる」「誠実あるのみと思う」「誠意をもって付合うこと」「お互いに気取らぬつき合いができるようにするのが大切ではないだろうか」「誠意をもってその人に接すればわかってくれるだろう」「誠実」「素直な心で相手に接することだ」「真心が大切だ」「自分の行動に〝ずるさ〟があってはいけない」「誠実に付合う」「誠意あるのみ」「正直が一番」「うまくやってゆこうなどと考えないこと、誠意あるのみ」

(ハ) 自己抑制・譲歩

「相手に対し自分が一歩身を引くこと」「忍耐あるのみ」「ある程度自分の気持ちを殺さなければならない」「ガマンすべきことが多い」「自分をある程度抑えること」「我を押通さぬことだ」「自己を極力抑えること」「自我をおさえて相手の身になって考えてやること」「自我をあまり強く出さないこと」「あまり自分の意見を押しつけない」「個性をおしつぶさなければ集団生活はやって行けない」「一歩ゆずる」「がまんが必要」「忍」「自分をあまり出さないこと」「半分は自分をおさえなければ」「自分の言いたい事だけを主張し通すのではなく、相手の事も十分理解してあげるような態度を常に持っていなければならないと思う」「自分もある程度がまんすることが必要」「自分のわがままばかりを通してはいけない」「時には自分をおさえなければならない」「自重することが大切」「自分が一歩さがる」「辛抱すること」

「腹が立つのを我まんしたり、ゆずり合う心が大事である」「自分をひかえめに」「自己の欲を去り相手の立場になって判断することだ」「言いたい言葉を抑えて」「自制が大切だ」「自分が折れること」「謙虚」「エゴを出さず互譲の精神を発揮する」

(二) 自己卑下・相手に対する尊敬・自己の人間形成

「自分自身が馬鹿になる」「尊重」「その人の長所と交わる」「人の趣味をけなさないこと」「馬鹿になって相手を立てること」「相手を好きになるように努力すること」「自分が馬鹿になる」「自分が一段と低くなることでしょう」「相手を立てる」「他人より下になる事である」「相手を尊重するこだ」「相手から何かを学び取ろうとすること」「自分をよくすることが相手をよくすることではなかろうか」「自分の心をみがく」「自分自身が充実した生活を送っていることが必要だ」「自分をしっかり把握した上で流れに身を任せること」「他人を敬まい自分自身の成長を伸ばす」「自分自身できた人間にならなくては」「自己の確立」「人徳と立派な人間性」

(ホ) 相手との協調・協力・妥協・和・日ごろのつき合い

「協調・理解」「愛情と妥協」「多少のことは折れて、口うるさい人とは付合わないことにする」「その人に合わせる」「協調すること」「調子を合わせる」「無理を言わずその人にうまく合わせる」「話を合わせる」「どこかでその人と妥協し合わなければならい」「まず寛容になる。すると人はもっと寛容になろうとする。そこに〝譲〟が生れ、相互理解が始まる」「心のふれあいが大切である」「自分の意見に固執しないで協調心が大切である」「自分からうちとけていくこと。自分のまわりにバリケードはったらだれもよりつかない。それにある程度のおしゃべり、話すこと」「感情的な人間はだましだまし使うようにしている」「五分の主張、五分の遠慮」「日頃の付合で」「交際」「和」「和をもって接すること」「仏の心」「何事においても協力してやる」「同じユーモアの持ち主〔であること〕」「自分も相手もなごやかにうちとけ合って」「ある程度八方美人になること」「したしみと友愛」「相手をおこらさないことである」「ヒューマンリレーションしかない」「ギブ・アンド・テイクの精神を持つことだ」「親切心をもつこと」

(ヘ) 話し合い・相互理解・飲酒

(a) 話し合い・会話

「色々と話し合う事」「話し合うことが大切だ」「会話が必要」「話し合いの場を多くもってお互の心をつかむ」「コミュニケーションと約束を守る事」「お互いに話し合い妥協する事も必要である」「言うべき事は言い、聴くべき時は聴き、ある場合には自分をおさえること」「よく話をすること」「常にコミュニケーションをもつことである」「雑談」「会話」「笑いが必要です」「話し合うことだと思う」「気軽に話をする」「対話が必要」「新鮮な話題にことかかないこと」「おだやかに話し合って行くことだ」

(b) 相互理解・相手の話を聞く

「まず相手を理解すべきだ」「何でもかくさずに話すことだ」「まず己を相手に知ってもらうとともに相手をよく知る必要がある」「なっとくが必要」「理解」「もっと人の立場を理解することだ」「お互いに理解を深めないとだめだ」「お互いの立場を理解することである」「相手をわかろうとしよう」「まず相手を理解し気をくばり多少相手の欠点は我慢してみたい」「相手の気持ちを理解する」「相手の趣味や性格を知ること。相手への思いやりを持つこと。…」「相手を知らなければならない」

「早く相手をよむこと」「相手の性質を知った上つきあうことだ」「自分という者を理解してもらう」「話しじょうずより聞きじょうずになる事だ」「他人の話を良く聞いてやる」「自分の発言より相手の気持ちを聞き理解する」「相手の言い分をよく聞くことが必要だ」「人の話も聞けるようになることが必要だと思う」「根まわしが必要」「他人の言うことに耳をかす」「相手の意見をよく聞くように心がけている」

(ト) 共同飲酒

「いっしょに酒を飲むこと」「酒を飲みに行くこともかなり大切と思う」「みんなで集まり酒をのむ、かたり合う」「社外で仕事以外のつきあい」「酒をおごりおごられ」「酒とゴルフとおしゃべり」

(チ) 自己表出・積極的接近

「自分をさらけ出して相手と接して行く」「相手のふところに飛びこんでいくことだ」「おたがいの気持ちを素直に表にだすことだ」「相手の性格をよく理解し、また自分自身を思い切り相手にぶつけることだ」「自分を思いっきり出して見てもらうこと」「自分をある程度出す、自分をいつわらない」「自分からすすんで人に接することだと思う」「自分から積極的に相手にとびこんで行くことだと思う」「何でも腹を割って話し合える事である」「自分のことを隠さずさらけ出したほうが相手とうまくやって行けると思う」「利害を忘れハダカになってつき合うことである」「本音でつき合うようにする」

(リ) プライバシーの尊重・深入りの回避

「あまり個人のプライバシーを侵害しないことだと思う」「あまり深入りせぬ事」「今の世の中あさく広くつきあうことだ」「相手の中にあまり深く入りこまず、ほどほどに理解し合っていく」

(ヌ) その他

「助け合いの精神である」「困った時に助けること」「助け合い」「小さな心配りが必要」「交際」「助け合い」「笑顔をひきつらせないことが大切だ」「まずは一日のあいさつから始まります」「話し方に気を付けること」「朝のあいさつ、よばれた時には〝ハイ〟と大きな声でいうことだ」「自然にふるまう、計算をしないこと」「人に好かれること」「あまりイライラしないことが大切」「にこにこしていること」「好き嫌いしないことなのだが……」「団体行動に出来るだけ参加することと思う」「当りさわりなくというところかな」「酒と女と笑い」「腹を太くもて」「度胸とあきらめ」「人の短所をすてること」「金（銭）」「お金と時間」「ばかし合う」「ゴマをすれ」「時間と金と体力がいる」「自分自身が中心になって他人をうまくまとめる」「相手を見て七変化すること」「他人に借りでなく貸しをつくるように心がけること」

(ル) 否定的見解・疑問視

「すべての人とうまくやってゆくのは不可能に近い。相手を選ぶことだ」「人のいない所に行けばよい」「気苦労が多い」「あまりそうは思わないので書けません」「相手の立場を理解しなくてはならないのでむずかしい」「と考えることもあるが本来不可能なことと思っている」「ときには何の努力もなく〔うまくゆくし〕、またときにはどうやっても不可能な場合もある」「？」「どうしたらよいのでしょう」

テイジは小さい。日本人は，「(自分が) 馬鹿になって相手を立てる」といった，自己を卑下した態度こそが，うまく世渡りをするこつだと心得ているのである。自分で関係を戦略的に操り，組み替えて行こうとするのではなく，むしろ所与的な「間柄」をいかに“活性化”するか，ということだけが視野のなかにあるように思われる。「間人」にとって「間柄」は，自分の“身の内”だからである。また，「ひととうまくやっていく」ということが，自己の利得へと方向づけられるのではなく，「世間」(「間柄」のネットワークだと考えられる) へのコミットメントの問題として意識されているようにも見受けられる。日本人にあっては，「間柄」を，個体レベルの問題に還元して考えることが難しいのであって，とかく，社会システム・レベルの問題と結びつけて扱おうとする傾向がある。だが「関与的主体」のあり方としては，その方が自然であることは確かであろう。

## Ⅲ 結びに代えて—研究方法論の問題点

以上の論議において，日本人の「人間モデル」を「間人」として措定し，その対人脈絡の形態を「間柄」として把握することを試みた。この試みは，日本の社会や文化の特質を自らのエミックスに基づいて分析するための理論的な基礎作業であった。

本稿では，まず「主体システム」を，対象化のレファレントの違いに応じて，「単独的主体」と「関与的主体」とに類型化した。前者の具象化された形態は，個体としての自己だけを対象化した「個人」である。また，自主体と客体との関連性をも対象化することによって，「間柄」という「関与的主体」が形成されるが，この後者の主体形態を個体レベルで体現する者として「間人」(脈絡人) が設定される。しかも「間柄」は，同時に「間人」間の脈絡そのものでもある。「間人」にとってそれは即自的な意義をもつものとされ，手段的に活用される「個人」間の「社会関係」と対置される。

こうした「主体システム」に関するパラダイムを理論的に確定する場合，「単独的主体」でのように，対象化のレファレントを自己にのみ求めるときは，個別性の契機が強く働く。他方，「関与的主体」に固有な「間柄」の対象化には，集合性の契機を伴う。これらの契機は，すでに触れたように相互規定的であり，したがって人間は両契機をあわせもつ二元的存在であることも確かであろう。しかし，二つの主体形態が，それぞれおのがじし主体性を貫徹するには，自らの契機を強調せざるを得ない。そこで「単独的主体」での個別性の強い主張は，いわゆる「個人主義 (individualism)」という形で表明されることになる。これに対する「関与的主体」での集合性の重視は，これまで「集団主義 (groupism)」と称されてきた。もっとも，「集団主義」というのは，「個人」対「集団」(ないし〈個〉対〈全体〉) という概念的対比に基づいているので，この場合，名称的には不適である。[41] むしろそれは，

「個人」と対置されるのが「間人」であるから，「間人主義（contextualism *or Jen*-ism)」と呼ばれるべきであろう。

「個人主義」は，(a)自己中心主義（ego-centeredness)，(b)自己依拠主義（self-reliance)，(c)対人関係の手段視（regard for interpersonal relations as means）の三点によって特色づけられる。[42] 他方，「間人主義」に関しては，(a)相互依存主義（mutual dependence)，(b)相互信頼主義（mutual reliance)，(c)対人関係の本質視（regard for interpersonal relations as an end in itself）という三つのポイントが指摘されよう。[43] これら二つの価値観（対人関係観）が，「個人」と「間人」という「人間モデル」を，また「社会関係」と「間柄」という対人脈絡のタイプを，それぞれ特徴づけていることは確かだが，それ自体は，しょせん「単独的主体」と「関与的主体」の基本属性であるにとどまる。だから，日本社会で「間人主義」が文化的エトスとして定着化しているからとはいっても，それでもって日本人に特徴的な「間人」類型や「間柄」性を説明することは，「関与的主体」の属性をその現実態に結びつけるだけに終ってしまう。それはトートロジーであるにすぎず，意味のある命題とはならない。したがって，その場合，日本人の文化的価値としての「間人主義」に基づいて「間人」や「間柄」の本質を探るのではなく，むしろ逆に，まず「間人」や「間柄」を一般的な分析概念に仕上げ，それらを適用することによって，日本の社会=文化の基本構造を明確にすることが必要である。本稿は，もちろん後者の立場をとろうとしている。このアプローチを，「方法論的間人主義（methodological contextualism *or Jen*-ism)」と呼ぶことにする。従来の日本論の多くが準拠していた「方法論的個人主義」が「個人」を分析単位としていたのに対し，この「方法論的間人主義」は，「間人」をベースにする新しい概念図式を準備する。[44]

ところで「方法論的間人主義」に準拠して日本論のパラダイム革新をはかる場合，その依拠すべき基礎理論（メタ・メソドロジー）を，何に求めることが妥当であろうか。筆者の考えでは，一般システム理論（general systems theory）が，恐らくその基盤となろう。「主体システム」概念から出発した本稿は，すでにその線に添うものであった。だが，その一般システム理論にしても，今のところなおも「個体」を分析拠点に据えているように見受けられる。

ブンゲによれば，一般システム理論は，原子論的接近法（atomistic approach）でも，また全体論的接近法（holistic approach）でもない。前者の存在論においては，世界はいくつかの種類の単位（モジュール）の集合体であるとされる。そして，その単位的な構成要素とまったく同じ特質と法則をもった事物が作り出される，と考える。したがって，還元主義的に，そうした構成要素ないし個体の挙動を分析することが，そこにおける基本的方法論となる。これに対し，後者の存在論では，世界を一つの有機的全体（organic whole）だと考え

る。それは，いくつかの局所的全体（partial wholes）に分解され，その各レベルには創発特性（emergent properties）が見いだされるとする。しかしその特性は分析的には説明されえず，全体は額面どおりに受けとられるべきものとされる。

一般システム理論は，各水準の創発特性を認める点までは全体論的接近法と同じだが，その特性が説明不能だとは考えない。それぞれのレベルの具体的システムの法則性は，それの構成要素の相互連関によって解明されうる，とする。つまり，一般システム理論の方法論は，分析と総合とをあわせもつ。だが，分析的手法を常套手段とする点では，原子論的接近法の方に近い。[45]

さらにブンゲによれば，一般システム理論を人間社会の研究に適用する場合，社会は，相互的に作用し合う諸個人から成り立つシステムであり，したがってそうした社会システム自体の特性と法則は，個人間の対（つい）の形での相互作用によって説明されうるのである[46]。この視角は，実際に，シンボリック・インタラクショニズムにおいて採択されているが，その研究における基本的な分析単位は，やはり「個人」に設定されており，したがってこのアプローチもまた，「方法論的個人主義」の枠内にとどまっている。

では，「個人」ではなく，「間人」をベースとする「方法論的間人主義」に適合した一般システム理論としては，どのような形のものが要請されるだろうか。そこでは，システムの最小の構成要素に，一個の自己完結した「個体」ではなく，“局所的全体”としての特性を示す「主体」を想定するような理論が望まれる。A・ケストラーによって提起されたシステム理論は，この要望に添うものである。

ケストラーは，人間および人間の作り出したシステムを，階層性をもったオープン・システムとしてとらえる。そのヒエラルヒーのなかのサブ・システム（それぞれ創発特性をもつ）に対して，彼は“holon”（亜全体・亜個体）という名称を与える。それは，「内側に向かって見れば自己完結的な独自の全体であり，外側に向かって見れば従属した部分である」ような実在を指している。ホロンのもつ自己主張的傾向（self-assertive tendency）は，それの全体性の動的な表現であり，また全体帰属的傾向（integrative tendency）は，その部分性の動的表現だとされる。つまりホロンは，(a)それを構成する部分に対しては自律的な全体として支配しつつ（super-ordination），(b)より高いレベルでのコントロールに対しては部分として服従しつつ（sub-ordination），(c)その局所的環境に対しては協調しつつ（co-ordination）働いているシステムなのである。ケストラーは，こうした階層性を「全層性（holarchy）」と呼んでいる。[47]

「関与的主体」というのは，このような「全層性」を示す「主体システム」の一つの典型である。したがって「間柄」という主体形態や，それを体現する「間人」は，ケストラーのいう“ホロン”として理解しえよう。そうした主体は，個体であるとともに一つの全体でも

あるために，一種の非線形的なシステムを構成している。そして「間人」間の脈絡としての「間柄」は，個体と上位システムとの調和的連関を志向するホロニック・パス（holonic path）として規定されよう。

ところで，これまで「要素還元主義」ないし「アトミズム」と称されてきた立場（ブンゲのいう「原子論的接近法」に等しい）は，(a)システムを構成要素に分け，(b)他と切り離された要素の性質を調べ，(c)その性質からシステム全体の性質が理解される，と想定する。このアプローチは，要するに，切り離された要素の性質の総和によって全体が決定され，したがって要素と全体との間に質の変化は生じないとする。それは一種の線形的なシステムを仮定している。[48] だが，人間システムが非線形的なものである以上，こうしたアトミズム的な立場からの接近には無理がある。それゆえ，よりホロニックな観点からのアプローチが望まれるのである。

さらにシステムの制御形態に関しては，以下の三つが区別されている。(a)個体がそれぞれ独立に制御され，その総和として全体の状態が決まる場合（独立的分散制御），(b)全体が，一定の規準に従って集中的に個体の状態を制御する場合（集中制御），(c)個体が，全体を秩序づけるように，自発的に協同して自らの行動を制御する場合（ホロニックな分散制御）。システムが非線形のオープン・システムであるときには，(c)の制御形態が妥当だと考えられている。[49] そうだとすれば，個体と全体との調和した（秩序のある）関係を志向するホロニック・パスがつねに“feasible”であるような「主体システム」が，社会的に望まれることとなろう。「間柄」や「間人」はこの要望に添っている。しかしこうした社会的評価がありうるとしても，それとは別に，「方法論的間人主義」を支えるような一般システム理論の展開は，日本論の研究における新しい地平を開くことであろう。本稿は，そのための理論的検討を行なったにすぎない。

---

〔注〕

1) 方法論的個人主義に立脚する日本論の難点については，拙論「日本社会論のパラダイム革新を目指して」，現代社会学，7巻1号，1980，29-45頁参照。

2) 村上泰亮・公文俊平・佐藤誠三郎，『文明としてのイエ社会』，1979，中央公論社，32頁。なお，公文によれば，「主体」は，(i)自己と他者とを区別し，世界におけるさまざまな状態・個物・個物間の関係を識別する「認識」の主体である，(ii)世界を事実としてのみ認識するにとどまらず，価値としても認識し，世界がとるさまざまな状態を自己にとっての望ましさという観点から順序づける，「評価」の主体である，(iii)世界をいろいろ識別するだけではなく，因果（産出）関係の連鎖としても認識し，自らが世界のある一部の事物の産者（原因）として「行為」（事物の使用とその選択決定を通しての世界の制御）する主体である，と説明されている（公文俊平，『社会システム論』，1978，日本経済新聞社，41-49頁）。

3) 公文俊平，前掲書，19頁。

4) ここでいう“親密な”（intimate）関係というのは，互いに無防備のまま接することができ，ぐあいの悪い頼み事も遠慮なく言え，慈善的責務からではない，自発的な同情・援助が期待できるような当事者間の関係のことである（Francis L. K. Hsu, “Psychosocial Homeostasis and *Jen*:

Conceptual Tools for Advancing Psychological Anthropology", *American Anthropologist*, Vol 73, No. 1, 1971, p. 26.)。

5) 村上泰亮・公文俊平・佐藤誠三郎，前掲書，17頁。
6) 村上泰亮・公文俊平・佐藤誠三郎，前掲書，17頁。
7) 主体としての間柄は，一種の集団的システムを形成する。村上・公文・佐藤は，それを「惣」と名付けている（村上泰亮・公文俊平・佐藤誠三郎，前掲書，18，220-223頁)。
8) 「間人」の英語表現 the contextual は，公文俊平による。Cf. Shumpei Kumon, "The New Middle Mass in Japan", Proceedings of the International Symposium "Japan Speaks" 1980, Ⅲ-15.
なおより正確な表現としては，"man-in-the-nexus" を用いることもできよう（前掲拙論「日本社会論のパラダイム革新を目指して」，38-39頁参照)。
9) 拙著『「日本らしさ」の再発見』，1977，日本経済新聞社，58頁。
10) 拙稿「日本人にとっての集団主義」，拙編著『集団主義』（現代のエスプリ，160号)，1980，5-21頁参照。
11) 今西錦司，『人間以前の社会・人間社会の形成』（今西錦司全集，第5巻)，1975，講談社，145，217頁。
12) 和辻哲郎，『倫理学・上巻』，1965（1937)，岩波書店，61頁。
13) 木村敏，『自覚の精神病理』，1970，紀伊国屋書店，153頁。
14) 和辻哲郎，『人間の学としての倫理学』，1951（1934)，岩波書店，13頁。
15) 南博，「人間関係論の日本における成立と展開」，年報社会心理学，10号，1969，158頁。
16) Francis L.K. Hsu, *op. cit.*, p. 29.
17) 木村敏，『人と人との間』，1972，弘文堂，137頁。
18) 木村敏，前掲書，154頁。
19) 木村敏，前掲書，154頁。
20) 木村敏，前掲書，75頁。
21) 木村敏，前掲書，146頁。
22) Salvatore Maddi, Personality Theories, 1972 (Revised Edition), pp. 18-178 (*passim*).
23) Francis L.K. Hsu, *op. cit.*, pp. 28-29.
24) *Ibid.*, pp. 24-28.
25) 村上泰亮・公文俊平・佐藤誠三郎，前掲書，220頁。
26) 濱島朗・竹内郁郎・石川晃弘編，『社会学小辞典』，1977，有斐閣，152-153頁。
27) Alfred Kuhn, The Logic of Social Systems, 1974, pp. 174-182; Unified Social Science, 1975, pp. 105-118.
28) 村上泰亮・公文俊平・佐藤誠三郎，前掲書，215頁。なお公文俊平は，国際シンポジウム「日本の主張 '80」において，「間柄」は，「間人」を結びつけている間柄構造と，そこに入っている個々の「間人」との両方を含めたものを指している，と述べている（山崎正和他著，『「顔のない巨人」の顔』，1981，文藝春秋社，135頁)。「人間」が，"にんげん" と同時に "じんかん" と読まれうる事実は，「間人」と「間柄」との相即性を示唆しよう。
29) 森有正，「経験と思想（Ⅰ－3）—出発点　日本人とその経験(b)—」，思想，No. 568, 1971, 10, 102-103頁。森は，「二人の人間が内密な関係を経験において構成し，その関係そのものが二人の人間の一人一人を基礎づける」ような結合の仕方を，「二項結合方式（combinaison binaire/rapport binaire)」ないし「二項関係」と名付けている（前掲論文，105頁)。
30) 森有正，前掲論文，103頁。森はまた，つぎのようにも述べている。「……『経験』の中核をなす人間関係において，『汝—汝』ということが，日本人の経験の具体な相であると考えたのである。そう考えたのではあるが，それは考え出したという意味ではなく，日本語そのものが，そういう機構を通じて言表されて来る，という形で明らかになって来たのである。そこでは『汝』はもちろん『私』にとっての『汝』であるが，『私』はその『汝』にとっての『汝』であるという点が重要なのである。『私』がすでに『汝』にとっての『汝』であるということ，これが言葉の綾ではなく，そういう方式が，『私』の中の凡ゆる『情念』の起点あるいは，理由になっていることが要点なのである。」（森有正，「経験と思想（Ⅰ－4）—出発点　日本人とその経験(c)—」，思想，No. 571, 1972, 1, 63-64頁。
31) 「アウトサイド・インの原理」は，行為の基準系をつねに自己自身の側に設定しようとする「イン

サイド・アウト（inside-out）の原理」と対照化される。拙著『「日本らしさ」の再発見』，252-262頁，および拙稿「『アウトサイド・イン』原理で動く日本人」，季刊・消費と流通，2巻4号，1978，48-52頁，参照。

32）村上泰亮・公文俊平・佐藤誠三郎，前掲書，216-217頁。

33）公文俊平，「日本人の行動・生活意識に潜む“日本的なもの”」，第54回日本社会学会大会報告要旨，1981，326頁。

34）岩田龍子，『現代日本の経営風土』，1978，日本経済新聞社，50-56頁。

35）久枝浩平，『契約の社会・黙約の社会』，1976，日本経済新聞社，51-53頁。

36）山崎正和他著，前掲書，134頁。

37）公文俊平によれば，われわれが水の分子を考えるとき，二個の水素原子と一個の酸素原子との結合構造と，その構造に含まれる個々の原子とを同時に考えている。これとアナロジカルに，「間柄」という言葉に，「間柄」の構造とそこに入っている「間人」とを含めて使うことにする，と公文は述べる（山崎正和他著，前掲書，135頁）。

38）西尾実・林博校註，『日暮硯』，1941，岩波書店，33頁。

39）『日暮硯』，41-42頁。

40）Alfred Kuhn, The Logic of Social Systems, pp. 187-188.

41）前掲拙稿「日本人にとっての集団主義」，6-9頁。

42）「個人」が，自己自身だけをレファレントとする対象化から生成される「人間モデル」であることを想起すれば，「個人主義」は，「自己主義」と表現するほうが妥当かも知れない。事実ボーゲルは，1979年8月23日，毎日新聞大阪本社における日本語での講演「洋魂和才」で，“individualism”を「自己主義」と表現した。なお，ここでの「個人主義」の三つのポイントについては，前掲拙著『「日本らしさ」の再発見』，77-78頁参照。

43）前掲拙著『「日本らしさ」の再発見』，79-80頁参照。

44）前掲拙論「日本社会論のパラダイム革新を目指して」，38頁参照。

45）Mario Bunge, “General Systems and Holism”, *General Systems*, Vol. XXII, 1977, pp. 87-88.

46）*Ibid.*, p. 88. このアプローチは dyad model を指している。

47）Arthur Koestler, The Ghost in the Machine, 1967.（日高敏隆・長野敬共訳，『機械の中の幽霊』，1969，ぺりかん社）訳書81，144頁。

48）内閣官房内閣審議室・内閣総理大臣補佐官室編，『科学技術の史的展開』，1980，大蔵省印刷局，43-44頁。

49）『科学技術の史的展明』，53頁。

# THE "MAN" MODEL and THE HUMAN NEXUS OF THE JAPANESE

Esyun HAMAGUCHI

This paper's aim is to clarify from the standpoint of general system theory the "Man" model of the Japanese and define their human nexus (*aidagara*). This analysis proposes a new methodological framework for Japanese studies. This is called "methodological contextualism" in contrast to "methodological individualism." In order to make this apprroach clear some conceptual consideration is needed.

First, there can be two kinds of actor's subject system. The "individual subject" objectifies himself without reference to the relation with others. Such a person regards himself as the sole object of his recognition, evaluation, and action. The referent of objectification is limited to oneself, and the interrelation with others is a secondary derivative from this solipsismic subject (self). The other system, the "referential subject," objectifies himself in the context of intimate relationship with others. Through the objectification of his functional reference to other subjects, this subject gives significance to its existence and defines its role. It should be noted that the latter subject consists of the objectified human nexus (*aidagara*) and of the contextual being within *aidagara*.

The "individual" person is a typical form of the former subject. It is the smallest unit of social existence and as an independent actor it has a definite volition and responsibility. His relation with others may be separated from him and manipulated by him. On the other hand, the "contextual" person or *kanjin* as a representative of the latter type of subject, is often found among the Japanese. He represents his own interrelations (*aidagara*) which are essentially interdependent among people. While the "individual" person has his self-consciousness as "ego" and his total traits are described as "personality," the "contextual" person keeps his psycho-social identity as "his own share" (*jibun*) and his characteristics are delineated by the concept of "*Jen*" as proposed by Francis L. K. Hsu.

The "social relation" between two "individuals" is different from the "human nexus" (*aidagara*) of the "contextual" persons. Analogically, the former is the segment of a line between two points (local connection), while in the latter, persons occupy certain points on the already existing "network" among individuals, thus being related only through the lines that compose such networks. As these lines constitute a "non-local" field (situation), the "contextual" person correlates with each other in a given

situation.

The prerequisite of "social relation" is a simultaneous and equal exchange of goods (reciprocity). The model of transaction is so clearly shown by Alfred Kuhn. In contrast to this, *aidagara* depends on the mutual reliance of both parties. In this relationships each confronts with one another not as "I" but as "you vis-a-vis you" as Arimasa Mori suggested. That is, ego is meaningful only as "an alter" (as used by Talcott Parsons) of its alter. In this type of relationships relative standing is required. However, the ties established is so stable that only some conditions are needed for its maintenace : (1) to confirm each other through communication to be the "contextual" person in the same "human nexus," (2) to try for a mutual understanding, (3) to give enough consideration toward other, (4) to co-operate and compromise with each other bearing in mind one's own "share." In old day Japan these divices were already used as exemplified in the old book titled "*Higurashi-suzuri.*" Even today they are supported by many as shown in the Sentence Completion Test (SCT) results.

Lastly, the meta-methodology of the "methodological contextualism" is sought in the general system theory developed by Arthur Koestler who coined the word "holon." Following this theory we can postulate the "human nexus" as "holonic path" among the "contextual" persons.